ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「仲間君、おかわり一杯あるから、遠慮せずに食べてね？」

　目の前のテーブルに並んだ、いささか数人で食べるには多すぎやしないかという数の料理に、俺はゴクンと唾を飲み込んだ。のぼる湯気から漂う香ばしい匂いが鼻腔を擽る。朝から何も食べていないので、リビングに来てから腹の虫がやかましい。

　しかしだからと言って、目の色を変えて飛びつきがっつく程、無遠慮な奴ではない。

「友絆、涎、涎」

　……どうやらそう思っていたのは自分だけのようだ。

　日ノ下に小声でそう囁かれた俺は、頬に燻る熱を感じつつ、慌てて手の甲でそれを拭う。

　そんな俺の様子に、クスクスと日ノ下の両親は笑っていた。

「すみません。いきなり泊めてくれと押しかけた挙句、こんなご馳走まで……」

　俺のこの言葉は、本心だ。

　だが、日ノ下の母親は首を横に振る。

「年頃だもの。色々あるわよね」

　笑顔でそう言う彼女に、俺の頭は下がるばかりだ。やはり俺が家出をしてきたことは勘づいていたらしい。

「空き部屋が無いから、海斗の部屋で寝てくれ。すまないね」

　父親も父親で、突然俺が泊まることになったことを聞いても、驚いた顔はしたものの、快く許可してくれた。今のこの言葉も、本当に済まなさそうな顔で言ってくれたが、寧ろこれ以上を望んだらバチが当たるというものだ。

　とは言え、まだ完全に彼等の事を信用しきれていない自分がいるのも事実なのだが。

　そんなことを考えたら、スっと体が冷えていった。

「友絆、どうかした？」

「……いや、すまない。何でもない」

　そんな自分がどこか醜く思えて、俺はつい謝ってしまう。

　まさか自分達が疑われているなんて知らない日ノ下は、今の俺の謝罪をどう受け取ったのか、微笑を浮かべて「気にするな」とでも言わんばかりに首を振った。

　ほんと、申し訳無い。

　だが正直、気が気でないことも事実。今後のためにも、彼等が自分の敵なのか否かは、さっさと見極めるべきだろう。

　目の前の大皿に転がっている、一際大きな唐揚げを自分の小皿に装いながら、俺はそう決意するのだった。

「お風呂入ってくるから、友絆は部屋でくつろいでて。あ、本とか勝手に見ちゃっていいから」

　さっきの決意から十分後。さっそくそのチャンスがやって来た。

　部屋に残された俺は、日ノ下が風呂場まで向かったのを確認すると、早速行動に移す。まずは、引き出しだ。

　俺は本棚の横にあるタンスの引き出しを、上から順番に開けていく。

「……それらしい物は無いか」

　そう言いながら俺は、何だか自分が泥棒であるかのような錯覚を覚えたが、気にしたらダメだろう。特に何か盗っていくつもりは無いのだ。うん。

　次はどこを探そうか。あまり流暢に探していると、日ノ下が戻って来てしまう。

　そこまで考えた時、ふと俺の目に、本棚に並べられた本の中にある、一冊だけ他の本と毛色の違う物が飛び込んできた。

　気になって取り出してみると、それはアルバム。

「……っ！」

　俺は暫く、表紙を見たまま固まっていた。

　俺達が『トラース』に関わるにあたって――誰が決めたのかは知らないが――かなり多くのルールが定められている。その中で、『チーム』への加入についての記述は実はあまり多くない。正確には、たった一つのルールさえ守ればそれでいい。

　それは、『研修所』を卒業することである。

　裏を返せば、『研修所』を卒業していない人間は『チーム』に加入することは出来ないのだ。

　一応例外はあるものの、少なくとも日ノ下は『研修所』に入らなければならないだろう。あそこは六年間の寮生活をする必要があり、その間、外部との連絡は一切絶たれるので、もしあいつがどこかの『チーム』に所属しているのなら、このアルバムには必ず不自然な空白期間が存在するはずだ。

　緊張で手が震える中、俺は表紙の端をつまむ。

　さて……中を見てみるか。

「あれ、友絆。何見てるの？」

「……～～～～っ？」

　突然背後から聞こえてきた音に、声にならない悲鳴を上げて飛び上がる俺。振り向くと、そこには日ノ下が。

　ドライヤーで乾かしてきたのか、髪の毛はもうすでに乾いている。しっとりとした肌の光沢がどこか艶かしい上、中学生にしてバスローブを身に纏っていることもあり、なんだか見ているだけで頭が痛くなってきた。

　そんな格好、一体どこで覚えた。

　ちなみに俺が今着ているのは、どうやらこいつが昔使っていたパジャマらしい。たしかに俺は日ノ下より少し小柄でほっそりとしているが、それでもちと腹が立つ。

「……あれ？　それってアルバム？　なんで友絆がっ？」

「いや、普通に本棚に置かれていたんだが」

　蒸気した頬で目を白黒とさせる日ノ下に、俺はそう答える。

　てっきりアルバムを奪い返しにくるかと思った俺だったが、その心配は杞憂に終わった。日ノ下はアルバムは見つかったのが余程ショックだったのか、その場で棒立ちになって暗い雰囲気を漂わせている。

　まあ、アルバムって他人には見られたく無いよな。

　動く様子は無いので、安心して俺はページを開く。雷に打たれたような顔をする日ノ下は無視だ。

　俺は、取り敢えずパラパラと最後までページをめくる。確認すべきことは一つだからだ。

「……」

「……あの、友絆サン？」

　日ノ下の絞り出す震える声を、俺はほとんど聞いていなかった。

　素早く、だが慎重に。そして――

　ついに、最後のページまで確認した俺は、天井見つめた。

　この気持ちはなんだろう。どう表現したらいいのだろう。

　俺は、そのままの状態でゆっくり口を開いた。

「なあ……」

「ド……ドウシマシタカ？」

「……悪かった」

「……ん？」

　カタコトで話す日ノ下に、俺はそう謝罪する。

　アルバムには日ノ下の成長の過程を証明するかのように、その経過を省く事無くびっしりと写真で埋め尽くされていた。生まれた時、幼稚園に入園した時、小学校に入学した時、誕生日は勿論の事、旅行、季節の行事、さらには日常を切り取った写真もある。アルバムに、こんなに写真を貼らずとも良いだろうと思ってしまった程だ。

　日ノ下のアルバムだけあって、当然どの写真も彼がメインに写っており、その隣には大抵、若い頃の両親の姿がある。写真を追う毎に、写っている少年は日ノ下に近づいてきて、不自然な変貌はどこにも無い。

　日ノ下が一般人なのは疑いようが無い事が、これで証明されたのだ。

「あ……ああ、もしかして、勝手にアルバムを見ちゃったことかな？　なら気にしなくてもいいよ。そこに置きっぱなしにしていた僕も僕だし」

「……ま、そんなところだ。悪かったな」

　本来なら、正直に話すのが日ノ下への礼儀なのだろう。だが、一般人に『チーム』の事をペラペラと話すのは色々とマズイ。『ワルキューレ』に迷惑がかかるかもしれないのもあるが、最悪、日ノ下に危険が及ぶ可能性もあるからだ。

　日ノ下が勘違いをしてくれるなら、それでいい。

「てか友絆。ちょっとしんみりしすぎじゃない？」

「そうか？　そんなつもりは無いんだが」

「もっと軽くていいよ。僕達、友達なんだしさ」

　友達、か。

　ふと、あいつの顔が浮かぶ。そういえば、目が覚めてから初めて、俺はあいつの事を思い出したかもしれない。

　今までなら、あいつの顔を払拭しようとしていただろう。

　だが、今は何故か、そうしようという気が起きなかった。

　かつての友を、俺はまだ信じたいと思っているのだろうか？　裏切られたと分かったのに？

「友絆？　どうしたの？」

　日ノ下の声で、俺は考えるのを止めた。

今は目の前の、こんな俺を『友達』と言ってくれた相手に集中しよう。

「いや、何でも無い。気にするなよ。ちょっとボーッとしただけだ」

「えー……我ながらいい一言を言えたと思ったのに、ボーッとしていたの？」

「悪い悪い。でも、そこはちゃんと聞いていたからさ」

　ジト目をする日ノ下に苦笑しつつ、俺は首を横に振ってそう答えた。

「で、これから何する？　寝るにはちょっと早いが」

　壁に掛かった時計を見れば、まだ八時を少し回った頃だ。いつもなら、食事の後片付けをしているか、部屋で勉強したり本を読んだりしているのだが、生憎それらは全て一人専用だ。精々、後片付けの時に誰かが手伝ってくれることが時々あるくらいである。

　複数人での遊びなら……『研修所』にいた頃は、休みの時はあいつと模擬戦をやったりと、主に戦闘訓練に近いことしかやらなかったっけ？

　で、今は……ん？

　そう言えば、あいつ等は一体、いつも何をしているのだろう？　偶に遊びに誘われるが、今までずっと断ってきた。この間のシャインピアの件もそうだ。

　……もしかして、というかもしかしなくても俺って、付き合い悪いのか？

「あ、じゃあ、ラノベ読む？」

　そう言われて、俺は辺りを見回した。まあ、それが妥当なところだろう。人の家に遊びに来て本を読むのが正しいのかどうかはさておき、日ノ下と一緒に何かをするのならば、それぐらいしか思いつかない。

「そういえばさ。感想、まだ聞いてなかったっけ？　あれ、どうだった？」

「感想って……あっ？」

　一瞬、何を言っているのか分からなかったが、そこでふと、日ノ下からラブコメもののラノベを借りていたことを思い出した。

　ヤバイ。全く読んでいない。

「……その様子だと、まだ読んでいないみたいだね」

「すまない。ちょっと纏まった時間が無くてな」

　俺の顔から理解したのか、今度は日ノ下が苦笑する番で、本当に申し訳無い気持ちで一杯になる俺。流石に、存在自体を忘れるってのは失礼すぎるだろう。

「来週までには読んでくるさ。……まあ、家に帰れれば、だけどな」

　そう言って、俺は深い溜息を吐いた。

　すると日ノ下は何を思ったのか、少し悩んだ顔で、本棚から一冊の本を取り出して俺に差し出す。

　タイトルは『ニートが異世界行ったらチートすぎて草不可避』という、最後の言葉がよく分からない小説だ。タイトルを飾るのは、なんだか詠をもっと男らしくした感じの青年で、いかにもライトノベルっぽい。

「これさ……読んでみなよ。俺ツエー系のハーレムノベルでさ、小説の書き方とかはちょっとクセが強いんだけど、ファンタジーの中じゃあ結構面白くてさ。今の友絆におすすめかもしれない」

　そう言われて、取り敢えず黙って表紙を開いてみる。

　日ノ下も棚から自分の読みたいラノベを取って読み始めた。

　暫く読んでみると、日ノ下が俺にこれを薦めたのが何となく分かってきた。

　ストーリーは、つまらないことで喧嘩し、家出した自宅警備員の社会人（通称ニート）が、いきなり異世界に召喚されて覚醒する、というもの。そこでの主人公といったら、まるで以前に見たお姉様のような強さを誇り、かつカラコンをつけた時の俺のようなっぷりで、どんどんと関わっていく女性を魅了していくのだが、主人公も自分の暴走っぷりには自覚があるらしい。

だがやがて、実は自分の他に家族もその世界に召喚されていた事を知った主人公は、はたして今の自分を見せてもいいものなのだろうかと悩む。

彼は、家出してしまったことを後悔していたのだ。彼がこの世界で無双する理由は一つ。元の世界に帰り、自分の家族に今までのことを謝罪することだったのだから。

丁度その時、自分がこの世界で一番最初に出会った、一番大切な女性が暗殺者に殺され、逆上した主人公はそいつを感情のままに甚振り殺す。だが間の悪いことに、その一部始終を自分の家族に見られてしまった。

もうダメだ。そう思った主人公はその場から逃げ出すのだが、仲間からの説得もあり、覚悟を決める。自分の家族と、正面から会って、話をすることにしたのだ。

仲間から励まされても尚、主人公は、自分の家族から軽蔑や畏怖の目を向けられるのではないかとビクビクしていたのだが――

結局、家族は自分の所に来るや否や、主人公を思いっきり張り倒し、叱りつける。だがそれは、主人公の想像していたものとは違った。

家族が怒ったのは、家出をして自分達を心配させたことだったのだ。勿論、殺人を犯したことも同様に怒られはしたが、そこに主人公の思っていたような感情は無かった。

たっぷりと叱られた後は、思いっきり泣かれ、それでもそこには、家族としての愛情はあったのだ。

ようやく和解した主人公とその家族。そしてここから、彼等の新たな物語が始まる。

そこで一巻は終わっていた。

「あ、友絆。もう読み終わった？」

「あ……ああ。中々面白かった」

　この言葉に嘘は無かった。正直、たかがラノベと侮っていたところはある。

　だがこの小説は、自然と俺の今の心境にスっと入ってきたのだ。

　シチュエーションは、全く同じ、というわけでは無い。

　それでも、この主人公と俺は、ちょっと似ていた。悩んでいる事もやや異なるが、それでもだ。

　気づけば、もう九時半。時間の流れというのは、集中しているとこうも早いのか。

　次の巻を貸そうとする日ノ下だが、俺はそれを断る。流石にもう、寝る時間だ。

　この部屋にベッドというものは無いので、日ノ下は押入れから敷布団を出して広げる。日ノ下の父親が、俺の分ということで、来客用の布団を持ってきてくれたので、俺はそれで寝ることになった。

　布団をしいた俺達は、床に就く。

　日ノ下がリモコンのスイッチを押すと、電気が消えた。

　さて、と、俺は布団の中で考える。

　俺は、どうすべきなのだろうか。